

桜の隊士

やさいせいかつ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人喰い鬼が蔓延る大正時代。両親がいない少女、司波桜乃是物心ついた頃から師であ
る冬芽小春の下で鍛錬を行っていた。しかしある日、冬芽小春は鬼の手によつて死亡す
る。保護された司波桜乃是師を殺した鬼への復讐を誓い鬼狩りになる事を決意した。

目

次

決意

最終選別

藤巻山

力ナエの夢

27 13 6 1

決意

”強くなりなさい 後悔しないように”

「ハア、ハア…：ハア」

深い森の中を彼女、司波桜乃(しばさくの)は走っていた。気を抜けば方向感覚さえ奪われそうな闇の中、長時間走り続けた彼女の身体は悲鳴をあげていたが”助けを呼ばなければ”そんな思いだけが彼女を一步また一步と前に進ませていた。

やつとの想いで麓の村までたどり着いた桜乃是見慣れた茅葺き屋根の家の戸を倒れ込むように叩いた。

「助けて!! 師範が、師範が死んじやう!!!」

悲鳴のような彼女の声にただごとでは無いと感じたのか、家の主、司波銀次郎(しばぎんじろう)は慌てて戸を開けた

「桜乃、落ち着け、何があつた!?」

「じいちゃん、鬼が出た、頸を切つても死なない鬼が!! 師範が一人で戦つてゐる、お願ひ師範を助けて……」

桜乃の意識はそこで途絶えた。

目が覚めると桜乃は見覚えがない場所で横になつていた。ここはどこだろう? そんな事を考えていた桜乃に声が掛かる

「目が覚めましたか?」

「あつ、はい。 ……あの、ここは?」

「ここは負傷した隊士や鬼の被害に遭われた方々の治療所ですよ。私はこの蝶屋敷を管理している蝴蝶力ナエと申します」

軍服を思わせる様な上下黒の隊服に白の羽織、腰まで伸ばした艶やかな髪と整つた顔。印象的な蝶の髪飾りは彼女の美しさを引き立てていた。

「そうですか……助けて頂きありがとうございました」

「いえ」

カナエは笑みを浮かべながらそう答えたが次第にその表情は曇っていく

「……貴方に伝えなければならぬ事があります、貴方の師である冬芽小春さんについてです」

その瞬間、桜乃の脳裏に昨夜の出来事が蘇る。

「師範は、師範は無事なんですか!?」

「村の人々から事情を聞き隊士を送り込みましたが、貴方の師の安否は確認出来ませんでした」

「えつ?」

「遺体の発見が出来なかつたんです。……しかし、生きてる可能性は少ないでしよう」

「師範が……死んだ?」

「残念ですが、おそらくは」

身体の力が抜け、世界に穴が空いた感覚に襲われる。

理解はできる、鬼と闘い遺体がみつからない、食べられたと考えるのが自然だ。ただ

気持ちが追いつかない。

その後の事はあまり覚えていなかつた。頬が濡れている、おそらく泣いていたのだろう。そして桜乃の中にははつきりと2つの感情が芽生えていた。鬼への憎悪と弱い自分への嫌悪感が。

「カナエさん」

「はい」

「強くなりたいです、強くなつてあの鬼を殺したい」

「…その道は辛く、険しいものです。死ぬかもしれません。貴方には幸せに暮らす選択もあるのですよ？」

「私は・ 師範を殺されました、選択肢などありません。あの鬼を知つてしまつた以上幸せに暮らす事など出来ないです。」

師範から教わつた剣で私はあの鬼を必ず殺します」

紫がかつた大きな瞳には、この年の少女には不釣り合いな憎悪と決意が表れていた。両親を鬼に殺され鬼滅隊に入った過去がある胡蝶力ナエにはそれ以上桜乃を説得する事は出来なかつた。

「分かりました。鬼滅隊への入隊には半年後に行われる最終選別を突破しなければなりません。詳しい説明は後でいたしますので、今は傷を治す事だけを考えてください」

「はい、ありがとうございます」

何かあれば近くの者に言つてくださいね、そう言つて胡蝶力ナエは部屋を後にしたが何か思い出したのか急いで戻つてきた。

「あつ、桜乃つて呼んでいいかしら？」

「へつ？」

間の抜けた返事に力ナエは思わず笑いがこみあげた。

最終選別

”鬼殺隊”政府非公認でありながら千年以上の歴史を持つ、その名の通り鬼を狩る組織である。最も信頼される9人の柱と呼ばれる隊士を中心に、数百名の構成員がいる。

一カンツ

蝶屋敷に乾いた音が響いた。

「流石ね桜乃、前の師の教えが相当良かったのかしら？」
力ナエは感心した様子だった。

今より半刻ほど前。

「いいですか桜乃、最終選別への条件はしのぶから一本取ること。準備は出来てますか？」

「はい！」

最終選別。鬼殺隊入隊の為の試験、その内容は過酷で毎年参加者の半数以上が命を落とす。

「しのぶも準備はいいですか？」

「いつでも大丈夫よ姉さん」

力ナエは一度頷く。

「初め！」

力ナエの声が響くとほぼ同時に2人の木刀は重なる。

時は現在へと戻る。

「…油断しただけよ」

黒い髪をまとめあげた蝶の髪飾り、整った顔立ちは姉・胡蝶カナエとよく似ている。悔しさをにじませた胡蝶しのぶの足元には叩き落とされた木刀が落ちている。

「しのぶは相変わらず負けず嫌いね、でも姉さんしのぶのそう言う所も好きよ」

しのぶは顔を真っ赤にして怒りを抑えていたが、カナエは気にする様子もない。半年間で見慣れた光景、桜乃はこの景色が好きだった。

さて、と仕切り直しカナエは桜乃を優しく抱き寄せる。

「半年間本当によく頑張りました、桜乃は私しのぶの自慢よ」

その言葉に”あたりまえよ”と言わんとばかりにしのぶは桜乃の小さい頭を撫でる。

桜乃の涙腺はそこで限界を迎えた。

「あらあら、桜乃は泣き虫ね〜」

「だつて、だつてカナエさんしのぶさんが ううつ… わたしうれしくて、ごめんなさい、服にはなみずついちやいましたあ うつうつ…」

その様子にカナエしのぶはアハハと笑う。

そこには鬼など無縁に思える3人の少女の姿があつた。

最終選別を前日に控えた桜乃は故郷の村を訪れていた。

「半年ぶりか？」

そう呟き桜乃是見慣れた家の戸を叩く。暫くするとガラガラっと戸の開く音が聞こえ司波銀次郎が顔を出した。

「桜乃か？」

「私の顔忘れちゃつた？」

そう言つておどける桜乃を銀次郎は抱き寄せる。

「文で無事だとは聞いておつたが、実際に会うまで安心など出来んかつたわ」

「ごめんじいちゃん。修行が辛くてさ、戻つたら甘えちゃいそうだつたから」

「どうか、どうか。ただ無事でよかつた」

そう言うと銀次郎は名残惜しそうに桜乃から離れる。

「鬼狩りになるんじやな」

「うん、師範と同じ鬼殺隊になる」

「どうか。」と言うと銀次郎は少し悲しそうな顔をみせたがそれ以上何も言わなかつた。

「ゆっくりしていく、この半年の話でもしよう」

桜乃は銀次郎に促されるまま居間へと昇り畳の上に腰を下ろすと半年間の出来事を話し始る。胡蝶姉妹と出会い本当の姉が出来た様だつた事、修行が大変だつた事。シユークリームと言う大好物が出来たこと。気づくと太陽は東に傾きはじめていた。

「そうか、そのシユークリンとか言うやつはそんなに旨いのか！」

「あはは、シユーカリームだよじいちゃん。いつか食べさせてあげるね」

「こりやまだまだくたばれんな！」

ワツハツハと口を大きくあけて笑う銀次郎を見て桜乃は懐かしさを感じた。

「もうこんな時間か」

「うん、そろそろ行かないと」

「寂しくなるな」

「私も寂しいよじいちゃん…あつ、じいちゃんに聞きたい事があつたんだつた。師範の呼吸について」

「小春の？」

「うん、零の型について師範は何かいつてなかつた？」

うーんと考える素振りを見せた後で銀次郎は答える。

「すまんが聞いた事がないの」

「そつか…」

ただ、そう言つて銀次郎は話を続ける。

「参考になるかは分からんが、小春は縁側で桜を見て、散りゆく花弁を感じていると言つておつた。儂には何のことかさっぱりわからんかったがな」

「花弁を：感じる」

「すまんな、力になれなくて」

「ううん、充分だよじいちゃん。ありがとう。じゃあ、私行くね」

立ち上がりろうとした桜乃に声が掛かる。

「ちよつと待て桜乃、儂も思い出した事がある」

そう言つて銀次郎は急いで物置に向かつた。暫くして戻ってきた銀次郎の手には何かが握られていた。

「手鏡？」

「そうじや、小春がな桜乃の為にと作つておつた」

「師範が」

「ああ、お守り代わりじや持つていけ」

そう言つて渡された手鏡は白地に桜の花の刺繡が施されていた。

「綺麗：じいちゃんありがとう！」

「無事でな、いつでも戻つてこい」

「師範がついてるんだもん、大丈夫だよ！」
「ああ、そうじやな」

行つてきます。そう言つて村を後にする、外はすっかり夕焼け色に変わりヒグラシが鳴きはじめていた。桜乃は決意を新たに蝶屋敷への帰路についた。

藤巻山

一最終選別当日

朝食を終えて準備を行なつていった桜乃の耳に聞き慣れた声が響く。

「桜乃、入つても大丈夫ですか？」

「カナエさん、大丈夫ですよ」

戸を開け部屋に入つたカナエは桜乃の前まで歩き、腰を落とす。カナエにはいつも
の笑顔では無く、神妙な面持ちだった。

「いよいよですね」

「…はい」

「この半年で桜乃は本当に成長しました、今更多くを言う必要はないでしょう。なので
今ここで桜乃に伝える事は一つです」

カナエは一呼吸置き桜乃の目を見つめる。

「司波桜乃、必ず生きて帰つてきなさい。私はここで死ぬようなやわな鍛錬をしたつも
りはありません」

その言葉に桜乃の高揚感が高まる。

「私は冬芽小春、胡蝶力ナエ、胡蝶しのぶの弟子です。こんな所で立ち止まる訳にはいきません。何があつても必ず生きて帰ってきます」

それを聞いてカナエは一度大きく頷とそこにはいつものカナエがいた。

「桜乃、これを。私どしのぶからよ」

そう言つて差し出されたカナエの手には羽織が乗つていた。桜色の生地の上に朱華

色、深紅、浅緋、3種の色の桜が舞つてゐる、まさに息を呑む美しさだった。

「これ私が貰つてもいいんですか?」

「もちろんよ、桜乃の為に作つたんだから」

「ありがとうございます! 着るのが勿体無い……」

「せつかく作つたんだもの、着てくれないと悲しいわ」

早く早くとカナエに促され羽織に腕を通す。

「うん! 良く似合つてるわ桜乃、やつぱりもとが良いのね」

目を輝かせそう言うカナエに桜乃は顔が暑くなるのを感じる。

「カナエさん程ではないです」

「あらあら、口まで上手くなつたのね」

そんないつもの会話に桜乃の緊張はいつしか解けていた。

「姉さん、そろそろ」

いつの間にか部屋の前に立っていたしのぶがそう言うとカナエは頷き桜乃を立たせる。

「桜乃なら大丈夫、頑張りなさい」

「はい！」

桜乃は頷き返事をする。

「桜乃、これ」

「しのぶさん、これは？」

「藤の花の香り袋、お守りよ。私から一本取つたんだもの、心配はしてないけど必ず帰つてきなさい」

「はい！ありがとうございます！」

桜乃は一度深呼吸をする。

「カナエさん、しのぶさん、行つてきます」

「いつてらっしゃい」

桜乃はもう一度大きく頷くと蝴蝶姉妹に見送られ蝶屋敷を後にした。

鬼は藤の花を嫌う。鬼を知る者なら皆が知つてゐるだろ。

藤襲山とはよく言つたものだ、一部の範囲を取り囲むように年中藤の花が咲き誇るこの山はまさに鬼の監獄。

その地で今宵、鬼殺隊候補生による命を掛けた最終選別が行われようとしていた。

(こんなにいるんだ…)

桜乃が藤襲山に着いた時には既に20人ほどの人が集まつていた。流石に鬼殺隊候補生と言つた所だろうか、皆が皆普通では無い雰囲気を放つてゐる。

暫くすると白と黒の髪が対照的な日本人形のような2人の子供が現れた。

「皆さま、今宵は最終選別にお集まりくださつてありがとうございます。この藤襲山には鬼滅の剣士様方が生け捕りにした鬼が閉じ込めてあり外に出ることは出来ません」

「山の麓から中腹にかけて鬼共の嫌う藤の花が一年中狂い咲いてるからでございます」

「しかしここから先には藤の花は咲いておりませんから鬼共がおります。この中で七日

間生き抜く

「それが最終選別の合格条件でござります。では行つてらっしゃいませ」

2人が見事な連携でそう言い終えると一気に周りの空気が張り詰める。桜乃は懷に入れた手鏡を握り深く呼吸をすると藤襲山の深部へ入つていった。

最終選別開始から四半刻ほど経つただろうか、桜乃はすっかり一人になつていた。喉の渴きを感じ水場を探していた桜乃は背後に嫌な気配を感じ、剣を構える。

「オンナひとりか、俺はついてるなあ」

灰色の肌に上下2本ずつの牙。黒目が極端に小さく頭からは3本の角が生えている。間違いない鬼だ。

「人間のにくうううう

鬼は牙を剥き出しにし、飛びかかる様に桜乃に迫る。

——桜の呼吸　式の型　”一重咲き”
ひとえさき

鬼の攻撃を右に避け放たれた横への一閃は見事に鬼の頸を捉える。直後鬼の身体が跡形もなく消え去つた。

「いける、戦える」

もう守られるだけじやないんだ、大切な人の為に戦える、鍛錬は無駄じやなかつた。そんな思いに泣きそうになるがぐつと我慢する。泣くのは全部終わつてからだ。

桜乃是その後も鬼を狩り続け擦り傷さえ負う事なく六日目の夜を迎えた。

終わつたらシュークリームをお腹いっぱい食べるんだ。こんなに頑張つたんだもん、それ位の贅沢許されるよね。あまりの危なげなさにそんな事を考えていた桜乃に緊張が走る。

「一ーッ！」

何かが腐つた様な匂いが鼻にまとわりつく。同時に今までの鬼とは比べものにならない気配を感じる。

「近い」

気配のする方へ足を走らせる。吸い込まれる様に鬼の元へ辿り着いた桜乃是その光景に目を丸くする。

(何、コイツは…)

目前に立つ鬼はもはや人の型を成していなかつた。7尺はあろう上背に巨木の様な身体の至る場所から無数に腕が生えている。

「また俺のエサが来たか、お前はこいつの次に殺してやる」

手鬼の近くに少女がへたり込んでいた、腰を抜かしたのだろうかまともに動けない様だ。

鬼の手が少女へと伸びる。

——桜の呼吸 壱の型 ”おうか桜華”

桜の呼吸最速の剣技。目にも留まらぬ速さで繰り出された一閃は鬼の腕を真つ二つにした。

「大丈夫?」

少女から返答はない、桜乃の言葉が耳に入つていない様だつた。相当な恐怖だつたのだろう。

(大丈夫、あの時とは違う。私は戦える)

桜乃は剣を構え直す。

「そんなに死にたいなら殺してやる。今年は俺の可愛い狐が居なくてイライラしてたんだ」

鬼の手が多方向から迫る。

——桜の呼吸 参の型 ”花吹雪”
はなふぶき

高速で繰り出される7連の突き、桜乃は全ての攻撃をいなす。

(手数だけだ、動きは目で追える)

落ち着けと自身に言い聞かせ桜乃は集中を高め、迫る腕を切り伏せる。

桜乃は確実に強くなっていた。並の鬼殺隊候補生なら簡単に殺されるであろう手鬼の縦横無尽の攻撃をいなし続ける。

だが、切つても切つても再生する手に加えて中距離からの攻撃。少女を守りながらでは頸を切る事は叶わない。

無尽蔵の体力を持つ鬼に対し有限の人間、長期戦になればなるほど不利となる事は明白だ。桜乃は次第に息が苦しくなる。

「だいぶ息が上がってきたな、そんな足手まといを庇うからだ」

手鬼はクスクスと笑う、もはや勝利は目前だと言わんばかりに。

”終わりが見えない”その思いに桜乃の身体は重くなる。

「くそつ」

左から2本、右から3本、上から2本手鬼の攻撃が迫る。

——桜の呼吸 伍の型 ”ゆめみぐさ夢見草”

移動しながらの回転切りで全ての腕を切りふせる、だが焦りから無理に鬼の頸を狙つた桜乃は背後に迫るもう一本の手への反応が遅れる。
(しまつた：)

背後から手鬼の一撃が迫る。

桜乃は反射的に目を閉じた。

：いつまで経っても衝撃がこない。ゆっくり目を開けると先程まで怯えていた少女が刀を抜いて立っていた。目の前には巨大な腕が転がっている。

「すみません、迷惑をかけました。行つてください、あなた一人なら逃げられるはずです」

そう言つた少女だが身体が酷く震えている。そりやそうだ、さつきまで腰を抜かしてたんだから。桜乃にはそんな少女を放つて逃げる事など出来なかつた。

「余計なことを」

手鬼が苛立ちをあらわにし攻撃を仕掛ける。

上、右、左から迫る手鬼の手を切り伏せると桜乃は少女の隣まで後退する。

「大丈夫、動けるなら一緒に逃げられる。私があの鬼の注意を引くから貴方はこれを」
桜乃は紫色の袋を少女に渡す。

「これは？」

「中に藤の花の粉末が入つてゐる、鬼の周りに散布して。あいつに効果あるかは分からな
いけど試す価値はあると思う」

「なら、なら私が囮に」

再び手鬼の攻撃が迫る。

「時間が無い、任せたから」

もう何本めかも分からない手鬼の腕を手を切り伏せ接近する。

肺が筋が悲鳴をあげていたが桜乃に先程までの焦りは無い。桜乃は確信していた、こ
れで終わりだと。これが最後の攻防だと。

何本もの腕を切り伏せ、残る腕を縫う様に手鬼の懷に入つた桜乃に全方向からの攻撃
が迫る。

だがそれが桜乃に届く事は無かつた。

「アアアアアアアア」

藤の花の香りが鼻腔をくすぐる。

(しのぶさん、助かりました)

戦いの最中、自身に迫るもう一人の少女に手鬼は気が付かなかつた。桜乃への警戒心はもちろんあつただろう、だが最大の要因は手鬼の油断だつた。

腰を抜かしへたり込んでた女だ、そんな奴に何が出来る。腕を一本切られたのが何だ、今もガタガタ身体を震わせ怯えているただの足手まといだ。そんな気持ちが手鬼の油断を誘い少女への警戒を怠つた。

手鬼が後退り、苦しむ様にもがいてる隙に桜乃是少女の手を引きその場を後にした。

十五分程走り続けたところで拓けた場所に出る。

「ここまで来れば大丈夫かな。ごめん、ちょっとだけ休憩」

限界だつた桜乃是そこで仰向けに寝転がつた。

「大丈夫ですか？」

「明日筋肉痛かも」

桜乃是泣き出しそうな顔で尋ねる少女を見て冗談っぽい笑顔で答える。

桜乃の意外な答えに少女の顔が少し緩んだ。

「貴方は、ほんとに優しいんですね。私の様な腰抜けを助けて頂きありがとうございます。」

「この恩は忘れません。」

「…優しくなんて無いよ。私はただ、後悔したく無かつただけ。…もう何も出来ないのは嫌なんだ」

桜乃は一瞬寂しそうな顔を見せるが直ぐにいつもの調子に戻る。

「あと、貴方は腰抜けなんかじや無いよ。あの時鬼の腕を切つてくれて無かつたらやられてたのは私だつた。それに本当に貴方が腰抜けなら鬼滅隊に入ろうなんて思わないと思うよ?ここまで生き残つたんだもん、自分の事認めてあげてもいいじやないかな?」

その言葉に少女の瞳から涙が溢れる。肩を震わせ泣く少女の背を桜乃は優しく撫でてやる。

「少しは落ち着いた?」

「はい、また情けないところを見せてしました」

良かつた。と答えると桜乃はいかにも嬉しそうな顔で少女の後方を指差した。

「ねえねえ、あれ」

少女は不思議そうにして振り返り、その光景に目を丸くする。

「綺麗、ですね
うん、そうだね」

最終選別の終わりを告げる朝日が登り始めていた。

力ナエの夢

7日間の戦いを終えた桜乃は鉛の様に重い足を引きずり、少女と共に藤の花が香る開始地点へ戻つて来ていた。

「…誰も居ませんね」

「きっと私達が最初だったんだよ、ちょっと待つてたらみんな戻つてくるよ。大丈夫」
 不安そうな少女を見てそう声を掛ける。だが薄々は気づいていた。7日間で会つたのは彼女一人だけ。日が経つにつれて人の気配すら感じなくなつていった。最終選別を突破するのは毎年半数以下、力ナエから聞いていたことが脳裏によぎる。
 (どうか私の勘違いであつて)

そんな桜乃の想いとは裏腹に最終選別開始を告げた2人の子供が現れた。
 「お帰りなさいませ」

「おめでとうございます、ご無事でなによりです」

2人が最終選別の終わりを告げる。他の参加者の安否を確認する勇気は桜乃には無

かつた。隣に居る少女も俯き黙つたままだ。

「まずは隊服を支給させて頂きます」

今後について2人から説明を受けた。鬼殺隊は癸・壬・辛・庚・己・戊・丁・丙・乙・甲の10段階で構成されており、今私達は一番下の癸と言う階級らしい。続いて子供達がパンパンと手を叩くと何処からともなく鴉が現れ肩にとまつた。鎌鴉と呼ばれる鴉で一人に一匹連絡用として付くようだ。

「よろしくね」

「ヨロシクネエ、ヨロシクネエ」

(…喋つた)

「鎌鴉は人語を理解し、話せます。何かあれば申し付け下さい」

桜乃が驚きのあまり硬直していると黒髪の子供が説明を加える。

「そ、そうなんですね。ありがとうございます」

あんなに手の生えた鬼が居たんだ、鴉が喋つても何も不思議な事なんてない。そう自分に言い聞かせ、無理矢理納得した。

「宜しいですか？ではあちらから刀を造る鋼を選んでくださいませ。鬼を滅殺し、己の身を守る刀の鋼はご自身で選ぶのです」

台の上に幾つかの玉鋼が置いてある。どれを選べば良いかなんて見当もつかない、何

か違ひでもあるのだろうか。

考えていても分かるはずがない、桜乃は直感を信じ一番近くにあつた玉鋼を選んだ。

「刀は完成まで十日から十五日ほどとなります。それではご武運を」

2人に見送られ桜乃は少女と共にその場を後にし、藤巻山の麓まで来て いた。

「本当にありがとうございました。何かお礼がしたいのですが」

「あはは、お礼なんていらないよ」

「ですが…」

「んー、じゃあ今度一緒に甘い物でも食べに行こうよ」

本当に礼など要らなかつたが、あまりに困つたような顔でみつめてくるのでそんな提案をしてみると少女は分かりやすく驚いた表情をみせる。

「そ、そんな事でいいんですか？」

「だめ？」

「いえ、それでよろしいのなら…」

「じゃあ決定！ そう言えば名前聞いてなかつたよね、私は司波桜乃って言うんだけど」「司波さんですか、綺麗なお名前ですね。私は神崎アオイと申します」

「桜乃でいいよ、じゃあ楽しみにしてる。またねアオイ」
はい、と返事をしてぶんぶんと手を振るアオイを背に桜乃は蝶屋敷に向けて歩き出す。

「師範、私は今日鬼殺隊士となりました。

蝶屋敷に着いた頃にはすでに辺りは暗くなり始めていた。

ひどく懐かしい感じがする。屋敷を飛ぶ蝶も庭に咲く藤の花も半年間で見慣れたはずなのに何十年か振りに帰ってきたみたいだ。

桜乃は変に感じた緊張を隠すように息を吐くと蝶屋敷の戸を開けた。

「ただいま戻りまー」「桜乃！」

言い終わる前に痛い程抱きしめられる。こんなに優しい花の香りがするのは多分この人だけだ。

「カナエさん」

「よかつた、ほんとうに」

少し泣いているのだろうか、鼻声になつてている。

「すみません、遅くなりました」

「いいのよ桜乃が無事ならそれで」

「姉さん、桜乃が帰ってきたの？」

カナエの声が聞こえたのだろうか、奥からしのぶが顔を出した。

「しのぶさん」

目が合うとしのぶは嬉しそうに微笑えんだ。

「おかれり、桜乃」

「ただいま戻りました」

待つてくれている人がいる、その有り難さに大切な人が居なくなつて初めて気づいた。

(もう失いたくない)

幸福感と不安が同時に押し寄せ、ごちや混ぜになる。

「だから言つたでしょ姉さん、桜乃なら大丈夫だつて」

「でもね、でもやっぱり心配じやない。桜乃はこんなに可愛いんだもの」

「やれやれと言わんばかりにしのぶが溜息をもらす。

「それで姉さんはいつまでそうしてつもりなの？」

「あら私つたら、ごめんね桜乃」

しのぶにそう言われたカナエは気づいた様に桜乃を抱きしめていた腕を緩める。

「疲れてるわよね。湯を張つてあるわ、ゆっくり身体休めてね」

「ありがとうございます」

桜乃はカナエに促されるまま蝶屋敷の風呂場へと来ていた。呼吸をするたび温まつた空気が肺へと入つてくる。タイル張りの床と壁、10人は入れるであろう湯船は相変わらず一流旅館の温泉の様だった。桜乃是身体を洗い流すと左足から湯へと入り、ゆつくりと肩まで浸かつた。身体が芯から温められ、緊張しつばなしだつた筋が弛緩していくのが分かる。

(村の皆んな元気かな、早く会いたいなあ)

まぶたが重くなつていくのを感じる。このまま眠つてしまいたい、そんな気持ちを抑え桜乃是風呂場を後にした。

桜乃是浴衣に着替えるとカナエとしのぶに一声掛けようと2人を探していた。長い

廊下を歩いていると見知った3人組みが視界に入る。

「きよ、すみ、なほ！」

「「桜乃さん！」」

蝶屋敷で働く3人娘。家族を鬼に殺され、孤児となつた所をカナエに拾われたらし
い。3人共まだ幼いが患者の看病や治療のサポートをこなし、蝶屋敷には必要不可欠な
存在となつていた。

「心配してました、無事でよかったです！」

きよがそう言うと残りの2人もうんうんと頷く。

「お腹空いてると思ってご飯いっぱい作つてます！あとで食べてください！」

すみのその言葉にありがとうと感謝を伝え、小さい頭を撫でてやると3人共顔を赤く
して嬉しそうに笑つている。

「しのぶさんとカナエさんに挨拶してからゆっくり食べるね」

「しのぶ様なら明日早いので床に就かれましたよ、カナエ様は先程縁側に居らつしゃ
いました」

「そつか、ありがとう！」

「「はい！」」

3人と別れた後、桜乃は縁側に来ていた。長く続く縁側の真ん中に彼女がポツリと座り込んでいる。

「カナエさん」

その言葉に反応してカナエが振り向く。月明かりに照らされ、いつもに増して妖艶な雰囲気に包まれている。その姿に桜乃は一瞬ドキリとした。

「桜乃、もう上がつたの？」

「は、はい、すごく疲れがとれました」

「よかつたわ。もう晩御飯は食べた？」

「いえ、この後頂こうと思つてます。カナエさんは何してるんですか？」

「月をね観てたの。今日は綺麗だなあと思つて」

桜乃はカナエの隣に座ると夜空を見上げる。そこには漆黒を照らす光源が悠然と浮かんでいた。

「ほんとだ、今日は満月ですね」

暫くの間2人で月を眺めていた。小春が死んでから月を観る余裕も無いほど駆け足で過ごしてきた。もしかしたら時が止まってるのかも知れない。そう錯覚するほど緩やかな時間が流れしていく。

「ねえ桜乃、私にはね夢があるの」

「夢ですか？」

「うん…鬼と人がね、仲良くする夢」

衝撃だった。世間一般の鬼の認識など”人を喰う化物”それ以上でもそれ以下でもない。ましてや力ナ工は鬼殺隊最高位の柱だ、恨みはすれど仲良くするなど誰が想像出来ただろうか。

「桜乃はどう思う?」

鬼と仲良くするなど考えたことも無い。だがその考えを少しも理解出来ない訳では無かつた。桜乃が憎んでいるのは師を奪つた鬼だけだ。鬼は元々人間、理性を失い人を喰う。哀れだとさえ思つていた。

「正直分かりません、考えた事も無かつたです」

「そう、そうよね…」

「でももし力ナ工さんやしのぶさん、私の大事な人達が鬼になつたとしたら、私は頸を切れないと思います」

その答えに力ナ工は一瞬目を丸くした後嬉しそうに笑う。

「桜乃はやっぱり優しいわね♪」

力ナ工に頭を優しく撫でられる。触れられているだけで心の底から安心出来る。失いたくないこの人を、守れるくらいに強くなろう。そう決意し桜乃はもう一度夜空を

見上げる。

空に浮かぶ月は先程よりも輝いて見えた。